What's New

Appeon InfoMaker® 2022 R3 (日本語版)

Contents

1 InfoMaker 2022 R3 (日本語版) 1
1.1 新機能 1
1.1.1 システム要件の更新 1
1.1.2 インストーラーの機能強化 1
1.1.3 タブの機能強化 2
1.1.4 テキストコントロールの変更 3
1.1.5 アプリケーションの NativePDF オプションを有効にする 4
1.1.6 DDDW と DDLB の機能強化 5
1.1.6.1 新しい dddw.validation および ddlb.validation プロパティ 5
1.1.6.2 DDDW と DDLB のオートコンプリート 5
1.1.7 .NET へのアップグレード 6
1.1.7.1 .NET 8.0 にアップグレード 6
1.1.7.2 .NET Framework 4.8 へのアップグレード 6
1.1.8 IDE の機能強化 6
1.1.9 Oracle の ID カラムをサポート 7
1.1.10 SQL Server の厳密な暗号化をサポート 7
1.1.11 ADO.NET ドライバーへのアップグレード 8
1.1.12 モダンなグラフ 8
1.2 バグ修正と既知の問題 9

1 InfoMaker 2022 R3 (日本語版)

1.1 新機能

この章について

この章では、InfoMaker 2019 R3 (日本語版) と比較しながら、InfoMaker 2022 R3 (日本語版) の新機能を紹介します。

1.1.1 システム要件の更新

- Windows 11 (32 ビットおよび 64 ビット) への IDE (PowerBuilder、InfoMaker、SnapDevelop) のインストールをサポートします。

Windows 8.1 への IDE のインストールはサポートされなくなりました。

- Windows 11 (32 ビットおよび 64 ビット) および Windows Server 2022 でアプリの実行をサポートします。

Windows 8.1 および Windows Server 2012 R2 でのアプリの実行はサポートされなくなりました。

- 新しいバージョンをサポート:
    - Microsoft OLE DB Driver for SQL Server (MSOLEDBSQL) 19.0 および 19.3
    - SQL Server 2022 (MSOLEDBSQL 19.3)
    - PostgreSQL 15 および 16 (ODBC)
    - Oracle 21c
    - Oracle 23ai
    - Informix 14.x

1.1.2 インストーラーの機能強化

PowerBuilder / InfoMaker インストーラーは、デモアプリケーションをインストールするためのより多くのオプションを提供します。

- 「デモをインストールしない」を選択することもできます。その場合、デモ アプリケーションとデータベースはインストールされません。
- デモ アプリケーションは SQL Server デモ データベースとともに提供されるため、デモ データベースとして SQL Server を選択できます。

PowerBuilder/InfoMaker インストーラーは、管理者権限を必要とせずに、管理者以外のユーザー (標準ユーザーまたはゲスト ユーザーとして Windows にログインして、インストーラーをインストールして起動し、オフライン インストーラーを今すぐダウンロードできます) に利便性を提供すると同時に、システムを不正な変更から保護するように強化されています (管理者以外のユーザーは、製品とコンポーネントをインストールするために管理者の資格情報を入力する必要があります)。

要約すると、インストーラーは次の側面から強化されています。

1. PowerBuilder/InfoMaker インストーラーのインストール (InfoMakerInstaller_bootstrapper.exe の実行) に管理者権限は不要になりました
2. PowerBuilder/InfoMaker インストーラーを起動する場合 (Windows の [スタート] メニューから、または InfoMakerInstaller.exe を実行して)、管理者権限は不要になりました。
3. オフラインインストールパッケージのダウンロード (インストーラーの「オフラインインストーラーのダウンロード」をクリック) に管理者権限は不要になりました。

ただし、システム ファイル、レジストリ エントリ、および重要な構成に変更を加える場合は、管理者権限が必要です。たとえば、インストーラーで [変更]、[更新]、または [インストール] をクリックして製品をインストールまたは更新しようとすると、続行する前に管理者のユーザー名とパスワードを入力するように求められます。

1.1.3 タブの機能強化

InfoMaker IDE ウィンドウにタブとして表示されるエディター/ペインタの場合、IM.INI ファイルで NewTabAtRightMost という設定がサポートされています。これは、ペインタ / エディターを IDE のタブ バーの左端から開くか、右端から開くかを決定します。

```
[Tabbedbar]

NewTabAtRightMost=0 //0: 左端の位置。1: デフォルト値、右端の位置。
```

タブ バーの右端にあるインジケーターは、開いているすべてのウィンドウのヘッダーを表示するのに十分なスペースがバーにない場合、異なる表示になります。

アイコン ( ) は、タブ バーから見えない開いているウィンドウがあることを示します。ユーザーはアイコンをクリックして、リストから見えないウィンドウを表示するように選択できます。アイコン ( ) は、開いているすべてのウィンドウがタブ バーから見えることを示します。ユーザーはクリックしてウィンドウを切り替えることができます。

1.1.4 テキストコントロールの変更

- 組み込みの**リッチ エディット コントロール (TE エディット コントロール)** は削除されました。
- 組み込みの TX Text Control ActiveX 15.0 および **TX Text Control ActiveX 24.0 Professional/Enterprise** は削除されました。
- 以前は、リッチ テキスト エディターは PDF 機能のためにサードパーティ ソフトウェア Podofo と連携していましたが、現在は PDFlib と連携するように変更されています。
- TX テキスト コントロール ActiveX は、最新バージョン (バージョン 31) にアップグレードされました。また、ランタイム ファイルもバージョン 31 で動作するように更新されました。

  pbtxtext.dll、pbrtc.dll、mfc120u.dll、msvcr120.dll、tx4ole31.ocx、tx31.dll、tx31_css.dll、tx31_doc.dll、tx31_dox.dll、tx31_htm.dll、tx31_ic.dll、tx31_obj.dll、tx31_pdf.dll、tx31_rtf.dll、tx31_tls.dll、tx31_wnd.dll、tx31_xlx.dll、tx31_xml.dll。

リッチ テキスト エディターのツールバーには、以下の新しいボタンがあります。

- RightToLeft – 右から左の順序で文字を挿入して表示します。
- LeftToRight – 左から右の順序で文字を挿入して表示します。
- Increase indent – テキストまたは段落をさらに右にインデントします。
- Decrease indent – テキストまたは段落を左余白に近づけます。

1.1.5 アプリケーションの NativePDF オプションを有効にする

NativePDF オプションをアプリケーション全体で有効にできるようになりました。以前は、ライブラリ (**ライブラリ オプション**) またはデータウィンドウ (データウィンドウ ペインタ > **データ エクスポート**) でのみオプションを有効にできました。

アプリケーションでオプションを有効にするには、[システム オプション] ダイアログ ボックス > [PDF エクスポート] タブに移動し、[PDF エクスポートには常に NativePDF! メソッドを使用する] オプションを選択します。

システム オプションは、ライブラリ オプションと同様に、[PDF エクスポートには常に NativePDF! メソッドを使用する] の指定、および NativePDF を使用したフォントのパッケージ化とアプリケーション プロパティの設定をサポートしています。

プライオリティ

InfoMaker では、**DW データ エクスポート、ライブラリ オプション**、および**システム オプション**で PDF エクスポートを NativePDF! に設定できるようになりました。

これら 3 つの設定の優先順位は次のとおりです: **システムオプション** > **ライブラリオプション** > **DW データエクスポート**。たとえば、

- システム オプションで **[PDF エクスポートに常に NativePDF! メソッドを使用する**] がオンになっている場合、**ライブラリ オプション**または **DW データ エクスポートの設定**に関係なく、マシン上のすべてのレポートで PDF エクスポートに常に NativePDF! メソッドが使用されます。

  SystemOptions で PDF エクスポートに常に NativePDF! メソッドを使用するのチェックがオフになっている場合、動作は**ライブラリ オプション**でチェックされているかどうかによって異なります。チェックされている場合は、PDF エクスポートに NativePDF! メソッドが使用されます。チェックされていない場合は、**DW データ エクスポート**の設定が使用されます。

ストレージ

ライブラリ オプションと **DW データ エクスポート**の設定は PBL ファイルに保存されるため、マシン環境から独立します。

システム オプションの PDF エクスポート設定は、Computer ¥HKEY_CURRENT_USER¥SOFTWARE¥Sybase¥InfoMaker¥22.0¥PDF Export の下のレジストリに保存されます。これらのレジストリ値は、マシンの現在の Windows ユーザーに

固有です。したがって、InfoMaker が別の Windows ユーザーによって開かれた場合、または PBL ファイルが別のマシンにコピーされた場合、現在のマシンの現在の Windows ユーザーの**システム オプション**の PDF エクスポート設定は、他の Windows ユーザーには適用されません。

EXE の動作

InfoMaker で EXE ファイルを作成すると、**システム オプション**の PDF エクスポート設定が EXE ファイルに書き込まれます。その結果、作成された EXE ファイルは、実行される環境に関係なく、PDF エクスポートに常に NativePDF! メソッドを使用します。

たとえば、InfoMaker IDE マシンの**システム オプション**で「**PDF エクスポートには常に NativePDF! メソッドを使用する**」がチェックされている場合、そのマシンで作成された EXE ファイルは、他のマシンで実行されたときに常に PDF エクスポートに NativePDF! メソッドを使用します。

1.1.6 DDDW と DDLB の機能強化

1.1.6.1 新しい dddw.validation および ddlb.validation プロパティ

ユーザーが DropDownDataWindow または DropDownListBox 編集スタイル列に値を入力すると、ドロップダウン リストにその値が存在するかどうかがチェックされます。存在する場合は値が受け入れられ、存在しない場合は、ユーザーに別の値を入力するよう求められます。この検証チェックを有効にするには、ペインタで [ドロップダウンの選択肢に対して値を検証] オプションを選択するか、スクリプトで dddw.validation または ddlb.validation プロパティを設定します。

このオプション/プロパティは、AllowEdit が有効な場合に有効です。

1.1.6.2 DDDW と DDLB のオートコンプリート

AutoCompleteMode プロパティが DataWindow オブジェクト プロパティ dddw.property および ddlb.property に追加され、次の機能がサポートされます。

- DropDownDataWindow および DropDownListBox でのデータ入力の自動補完をサポートします。
- DropDownDataWindow および DropDownListBox に入力されたデータに応じてデータをフィルタリングすることをサポートします。

1.1.7 .NET へのアップグレード

1.1.7.1 .NET 8.0 にアップグレード

次の機能は .NET 8.0 で動作するようにアップグレードされました。

- コンピューター上で .NET SDK 8.0 が検出されない場合は、InfoMaker インストーラーによってインストールされます。
- ADO.NET データベース接続には、SQL Server、Oracle、および ODBC 接続用の .NET 8 データ プロバイダーが必要になりました。
- 画像選択 ツールは .NET 8 を使用して構築されています。

1.1.7.2 .NET Framework 4.8 へのアップグレード

次の機能は、.NET Framework 4.8 で動作するようにアップグレードされました。

- コンピューター上で .NET Framework 4.8 が検出されない場合、InfoMaker インストーラーによってインストールされます。
- DataWindow BLOB コントロールが動作するには、.NET Framework 4.0 以降の互換性のあるバージョン (4.8 など) が必要です。
- Excel12 のサポートには、.NET Framework 4.0 以降の互換バージョン (4.8 など) が必要です。

1.1.8 IDE の機能強化

InfoMaker IDE には次の機能強化が加えられています。

- 「最近使用したオブジェクト」メニュー リストからすべてのオブジェクトまたは特定のオブジェクトを削除できるようになりました。

  メニューの「ファイル > 最近使用したオブジェクト > すべてクリア」を選択して、最近使用したオブジェクトをすべて一度に削除するか、各オブジェクトの後の閉じるアイコンをクリックして個々のオブジェクトを削除できます。

- SQL Select を使用してレポートを作成するときに選択するテーブルをフィルターするためのフィルター ボックスを追加します。
- ストアド プロシージャを使用してレポートを変更するときに選択するストアド プロシージャをフィルターするためのフィルター ボックスを追加します。
- 「検索引数の指定」ダイアログでマウス ホイールを使用してレコードをスクロールできるようになりました。

1.1.9 Oracle の ID カラムをサポート

Oracle データベースの ID カラムをサポートします。

- DataWindow オブジェクトが作成されると、Identity カラムが自動的に設定されます (データベースから読み取られます)。[更新プロパティの指定] で Identity カラムを変更できます。
- Identity カラムを含む行を挿入する場合、Identity カラムは INSERT ステートメントから除外されます。その値は、GENERATED BY DEFAULT に基づいて生成されます。
- 新しい行が挿入されると、更新後にその行の ID 列の値が表示されます。

  メモ：データウィンドウは、更新後に新しく追加された行の Identity カラムの最大値を自動的に取得します。したがって、Identity カラムが負の数で自動的に増分される場合 (これは Oracle および ADO.NET ではサポートされていますが、ODBC ではサポートされていません)、新しく追加された行に表示される値は正しくない可能性があります。正しい値を取得するには、データウィンドウで Retrieve を実行できます。

- IDE データベース ペインタで Oracle テーブルの自動増分列を直接追加できるようになりました。カラムのデータ型を NUMBER IDENTITY または FLOAT IDENTITY に設定することで、これを実行できます。句は次のようになります。

```
GENERATED ALWAYS AS IDENTITY INCREMENT BY 1 START WITH 1
```

1.1.10 SQL Server の厳密な暗号化をサポート

DB プロファイルの「データの暗号化」オプションに、新しい暗号化タイプ「厳密」が追加されました。厳密な暗号化タイプにより、SQL Server 2022 で TDS 8.0 を活用できるようになります。

「厳密」は、次の SQL Server ドライバーを選択した場合に使用できます。

- OLE DB Driver for SQL Server (MSOLEDBSQL 19.x)

```
SQLCA.DBMS = "MSOLEDBSQL SQL Server"
SQLCA.AutoCommit = False
SQLCA.DBParm = "Provider='MSOLEDBSQL19',Encrypt=2"
```

- ADO.NET provider for SQL Server

```
SQLCA.DBMS = "ADO.Net"
SQLCA.AutoCommit = False
SQLCA.DBParm = "Provider='SQL Server',PROVIDERSTRING='Encrypt=Strict;'"
```

- MSOLEDBSQL 18.x および SNC SQL Native Client は「厳密」タイプをサポートしていません。

1.1.11 ADO.NET ドライバーへのアップグレード

ADO.NET データベース ドライバーのアップグレードとリファクタリングにより、データベースの基盤となるドライバーが変更されました。

現在、基盤となるデータベース ドライバーは、Oracle、SQL Server、および ODBC 経由の接続のみをサポートしています (IDE は ASE と SQL Anywhere のみをサポートしています)。そのため、PowerBuilder ランタイム パッケージャーとデータベース プロファイル設定ウィンドウの両方に対応する変更が加えられます。

1.1.12 モダンなグラフ

グラフの全体的な表示が以下の点で改善されました。

- 元のグラフの 14 色の古い色は、現在の主流のスタイルに従った新しい配色に置き換えられました。
- 新しいスタイルのグラフは、よりフラットでモダンなデザインになっているだけでなく、アップグレードされたテクノロジ GDI+ を利用して線をより滑らかにし、ギザギザのエッジを排除しています。
- 3D スタイルのグラフは新しい配色のみをサポートし、線のスタイルは元の従来のスタイルのままです。
- 2D スタイルの棒グラフとヒストグラムの値軸の実線と凡例の境界線が削除されました。

- 折れ線グラフのデフォルトの白抜きボックス シンボル値は固定の白抜きドットに置き換えられ、シンボル値の変更はサポートされなくなりました。
- 散布図の値は実線のドットに置き換えられました。
- モダン グラフ スタイルとテーマの両方を適用すると、テーマの配色が優先されますが、2D スタイル グラフの線のスタイルにはモダン スタイルが使用されます。

im.ini ファイルで最新のグラフ スタイルを有効にすることができます。

```
[Application]
ModernGraph=1
```

1 はモダン スタイル、0 はオリジナルの伝統的なスタイルを表し、デフォルト値は 1 です。

1.2 バグ修正と既知の問題

詳細は https://docs.appeon.com/im2022r3jp/release_bulletin_for_im/ を参照してください。